Osaka University Knowledge Archive

Title	3歳児健診に訪れた母親の育児に対する思い
Author(s)	宮野, 遊子; 藤本, 美穂; 山田, 純子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2013, 19(1), p. 17-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56724
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

—研 究 報 告—

3歳児健診に訪れた母親の育児に対する思い

宮野遊子*・藤本美穂**・山田純子***・石井京子****・藤原千惠子*

要 旨

3歳児健診に訪れた母親の育児に対する思いを明らかにするため、質問紙調査の「育児に対して日頃感じること」について書かれた自由記載欄の内容分析を行った。分析対象は、保健センターの3歳児健診に訪れた母親のうち調査票の自由記載に回答があった292名であった。結果は、【育児に対する不安感・困難感】【育児に対する肯定感・信念】【育児に関して必要としている支援】の3つのテーマが抽出された。【育児に対する不安感・困難感】は6つのサブカテゴリーから《育児そのものに対する不安感・困難感》と《育児をする自分に対する不安感・困難感》の2つのカテゴリーが構成された。【育児に対する肯定感・信念】は4つのサブカテゴリーから《育児そのものに対する肯定感・信念》と《育児をする自分に対する肯定感・信念》の2つのカテゴリーが構成された。【育児に関して必要としている支援】は8つのサブカテゴリーから《育児環境・育児制度》《人的サポート》《情報サポート》の3つのカテゴリーが構成された。自己実現など自己の在り方に注目が集まる現代社会において育児する自分をどのように捉えるかという側面の内容が抽出され、育児を通して母親が自己肯定感を高められるような育児支援の充実が重要であることが示唆された。

キーワード：育児、母親、育児への思い、育児支援
Keywords : child rearing, mothers, feelings toward child rearing, child rearing support

Ⅰ. 諸言

我が国では、社会構造の変化と共に、子育てをめぐる環境も大きく変容した。かつて、子育ては、地域共同体のなかでの成員同士による相互扶助や拡大家族における祖父母のサポートにより成立していた。現代では、都市部を中心に核家族世帯が多くを占め、在宅親子の地域における「孤立化」が社会問題となっている[1)]。さらに、いわゆる「母性神話」は我が子を虐待する親の存在などから近年否定されつつあるものの、依然我が国においては母親の育児は本能的であり、一義的に母親がそれを担い、どの親もそれが可能であるという考え方がまだ生きている[2)]。育児が「個人化」していくことは母親の教育に対する自由裁量を高める一方、育児に対する思いを他者と共有する機会が減少することで、育児不安や育児ストレスを助長する原因にもなっている。こうした傾向を是正するためには、育児という営みを社会的にサポートしていくことが必須となってくる[1)]。

これまで、母親の育児不安や育児に対する認識についての研究は多くの積み重ねがあり[3)4)5)]、育児不安の高い母親や低出生児の子どもを出産した母親など、対象を限局した研究[6)7)]へも広がりもみられているが、急速な社会情勢の変化の中では母親の育児に対する思いも常に見直していくことが必要である。また、3歳児健診という日常的場面での母親の思いは、地域の医療従事者にとっての有用性が高いと考える。

そこで本研究は、3歳児健診に訪れた母親を対象とした質問紙調査の自由記載から、育児に対する思いを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 分析対象

調査は、大阪府下43市町村のうち、協力の同意が得られた保健センター5箇所(3市)で開催された3歳児健診に訪れた母親1479名を対象に行われた。調査票は562名から回収され（回収率38.0%)、そのうち母親が自由記載欄に記入している292名を分析対象とした。

2. 調査期間

調査は平成23年11月～平成24年3月に実施した。

3. 調査方法

調査は、無記名自記式の質問紙調査を行った。健診受付時に研究代表者または研究分担者が調査票を配付し、研究目的および倫理的配慮について口頭および書面を用いて説明を行った。調査票の回収は、対象者自身が大学宛に郵送または会場に設置した回収箱に投函してもらう方法とした。

*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 **大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程 ***森ノ宮医療大学
****大阪市立大学看護学研究科

4．分析方法

本研究は、地域で育児をする母親のレジリエンス尺度の開発のために作成された質問紙の一部である「育児に対して日頃感じておられることについて、何でも自由に記載して下さい」という項目の内容分析を行った。書かれた自由記載内容を熟読し、1つの意味内容を1データとして抽出した。そして同じ意味をもつデータをまとめてコード化し、類似性のある内容をまとめてサブカテゴリー、カテゴリーに集約した。また、抽出されたコードの内容や、サブカテゴリー、カテゴリー化が適切であるかについては質的研究のスーパーバイズを受けて随時検討し、真実性、妥当性が確保できるように努めた。

内容分析とは、表記されたコミュニケーション内容を客観的、体系的に記述するための調査方法であり、記述された内容をカテゴリー化して体系的に表す方法である[8]。

5．倫理的配慮

本研究は大阪大学医学部保健学倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には、研究目的、研究参加の自由、プライバシー保護などの具体的配慮について調査票の表紙に記載し、口頭でも説明を行った。なお、調査の同意は調査票の返信によって得られたとした。

Ⅲ．結果

1．対象の属性

子どもの数は、1人74名(25.3%)、2人160名(54.8%)、3人52名(17.8%)、4人6名(2.1%)であった。家族形態は、両親と子ども（以下：核家族）264名(90.4%)、核家族とその他の家族26名（8.9%)、無回答2名（0.7%）であった。母親の就業状況は、就業中92名(31.5%)、現在は休業中11名(3.8%)、就業していない189名(64.7%)であった。

2．育児に対する認識と必要としている支援

自由記載の内容を分析した結果、育児に対する認識と必要としている支援は【育児に対する不安感・困難感】【育児に対する肯定感・信念】【育児に関して必要としている支援】の3つのテーマが抽出された。以下、テーマは【　】カテゴリーは《　》、サブカテゴリーは〈　〉、コードは「　」で示す。

1）【育児に対する不安感・困難感】（表1）

【育児に対する不安感・困難感】は、6つのサブカテゴリーから2つのカテゴリーで構成された。

《育児そのものに対する不安感・困難感》には〈子どもとの対応に関する不安がある〉〈子どもとの対応に関する困難感がある〉〈子どもの将来に対する不安がある〉〈子どもの成長に対する不安がある〉の4つのサブカテゴリーが含まれた。

〈子どもとの対応に関する不安がある〉には「しつけの程度がわからない」などの3つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

自分のしつけの仕方が間違っているのではないか、自分の言ったことで子どもが将来どんな風に大きくなってどんなことを考えるのか、たまに不安に思ったりもします。

〈子どもとの対応に対する困難感がある〉には「複数の子どもへの対応が難しいと感じる」「成長した子どもへの対応が難しいと感じる」などの6つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

きょうだいそれぞれで性格がまったく違うので、どうしたらいいかわからない。

家で間違ったことをしたときに怒ると、逆に子どもも反抗し、暴言を吐いたりすることもあります。そんなときに、どうしたらいいか悩んでしまいます。

〈子どもの将来に対する不安がある〉には「子どもの将来が心配」などの3つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

育児というか、日本の未来について、子どもたちの負担が心配です。

〈子どもの成長に対する不安がある〉には「食べないのが悩み」などの2つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

ごはんをなかなか食べてくれないので、体が小さくて不安。

一方、《育児をする自分に対する不安感・困難感》には〈育児をする自分に対する不安がある〉〈育児をする自分に対する困難感がある〉の2つのサブカテゴリーが含まれた。

〈育児をする自分に対する不安がある〉には「子どもの成長についていけないと感じる」などの5つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

一日の大半を子どもと過ごしているのが母親である以上、ふとしたことの原因が自分にあるのでは、とつい思ってしまいます。特に自分自身が弱っているときなどはそれを大きなプレッシャーに感じてしまうことも少なくありません。〈育児をする自分に対する困難感がある〉には「自分の感情をコントロール

したい」「子どもと離れる時間がほしい」などの8つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

子どもはかわいいけど、自分がしんどい時は感情的に怒ってしまって自己嫌悪に陥ることが多々ある。

育児にストレスを感じている母親のほとんどは、子どもから離れての息抜きができていないと思います。

2)【育児に対する肯定感・信念】(表2)

【育児に対する肯定感・信念】は、4つのサブカテゴリーから2つのカテゴリーが構成された。

《育児そのものに対する肯定感・信念》には〈育児そのものに対して肯定的に感じる〉〈育児の方法に関して信念がある〉の2つのサブカテゴリーが含まれた。

〈育児そのものに対して肯定的に感じる〉には「育児は興味深いと思う」などの7つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

育児は大変ですが、ちょっとした成長が本当に喜ばしく思います。上の子が赤ちゃん返りしたときは全く言うことを聞かず泣いてばかりでしたが、「赤ちゃんじゃなくぼくを見て!」という2歳児の心がわかって、今となっては親子で通じ合えることが2倍になったと感じています。下の子ももうすぐイヤイヤ期で「またかぁ・・」と思う所ですが、長男より上手に育てられるよう努力しようと思います。

〈育児の方法に関して信念がある〉には「自分のやり方で育児を行うのが大切と思う」などの6つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

元気が一番。よく食べ、よく遊び、よく寝ることってとっても大切だと思っています。

一方、《育児する自分に対する肯定感・信念》には〈育児をする自分に対して肯定的に感じる〉〈育児の考え方に関して信念がある〉の2つのサブカテゴリーが含まれた。

〈育児をする自分に対して肯定的に感じる〉には「子どもの成長が喜びである」などの3つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

働くことが一番!と思っていた私でしたが、子育てを始めたら、これ以上の幸福はない!!と思いました。

毎日ほんの少しずつ子どもの成長を育んでいけて本当に幸せです。

〈育児の考え方に関して信念がある〉には「育児で自分も成長すると感じる」などの4つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

表1 育児に対する不安感・困難感

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
しつけの程度がわからない	子どもへの対応に関する不安がある	育児そのものに対する不安感・困難感
子どもの対応にジレンマを感じる		
子どもの行動にイライラする		
汚れる遊びは抵抗を感じる	子どもへの対応に関する困難感がある	
性別が違うと対応が難しいと感じる		
複数の子どもへの対応が難しいと感じる		
複数の子どもの世話は大変と感じる		
育児は体力的に大変である		
成長した子どもへの対応が難しいと感じる		
子どもの将来が心配	子どもの将来に対する不安がある	
将来の社会が心配		
社会に子育てが下手な親が多いと思う		
食べないのが悩み	子どもの成長に対する不安がある	
子ども仲間が得にくいのが心配		
子どもの成長についていけないと感じる	育児をする自分に対する不安がある	育児をする自分に対する不安感・困難感
育児を通して自分に否定的な感情を抱く		
他の子どもと比較してしまう		
子どもに与える自分の影響を不安に思う		
育児は達成感が得られないものだと思う		
自分の感情をコントロールしたい	育児をする自分に対する困難感がある	
自分の時間がほしい		
子どもと離れる時間が欲しい		
余裕がないと感じる		
正しい情報の判断が難しいと感じる		
世間がもっと働く母を理解してほしいと思う		
家事との両立が難しい		
仕事との両立が難しい		

‘子育て’といいますが、私たち親を人として親として成長させてくれる‘親育て’‘自分育て’でもあると思います。親が自分の心のケアをきちんとして精神的に落ち着いていられたら、子どもも自ずと自分の能力や可能性を最大限に伸ばせるのではないかしら！？と思っています。

3）【育児に関して必要としている支援】（表3）

【育児に関して必要としている支援】は3つのカテゴリーと8つのサブカテゴリーで構成された。

《育児環境・育児制度》には〈育児環境を充実させてほしい〉〈育児制度を充実させてほしい〉の2つのサブカテゴリーが含まれた。

〈育児環境を充実させてほしい〉には「育児交流の場を充実させてほしい」「育児プログラムを充実させてほしい」などの5つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

コミュニティーな場所が、参加しやすい条件でより多くあればいいなと思います。

託児のある無料の育児講座とかもっとあったらいいのにな・・と思う。

〈育児制度を充実させてほしい〉には「育児施策を充実させてほしい」「経済的に不安を感じる」などの8つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

出産してから3か所に住み、子育て支援を利用させてもらっていますが、やはり地域差があると感じました。実家も遠方ですし行政サービスに頼らざるを得ないので、充実して頂けるとありがたいと思いました。

もっと経済的余裕があれば2人目も欲しいが、今の状態では1人しか産めないのが悲しい。

《人的サポート》には〈周囲の人からのサポートが必要〉〈専門職からの適切なサポートが必要〉〈家族からのサポートが必要〉〈多世代からのサポートが必要〉〈同世代からのサポートが必要〉の5つのサブカテゴリーが含まれた。

〈周囲の人からのサポートが必要〉には「相談相手が欲しい」「人的育児サポートがなくて困る」などの5つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

気楽なおしゃべり、気楽なグチが言えることは、心が豊かになると思います。私が今虐待、ネグレクトをしないのは、何でも言える、聞ける人がいるからでしょう。

たまにリフレッシュしたくても、私が病気でない限り子どもを預かってもらえず、自由がない。

〈専門職からの適切なサポートが必要〉には「支援者の違いによってストレスが生じる」などの2つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

保健師さんによって健診のときの評価が違う。行くと不安になるだけのことも多く、こういう思いをするから健診に行かず、家庭内暴力等の発見が遅れたりするのではないかと思います。

〈家族からのサポートが必要〉には「夫の協力は重要だと思う」などの5つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

主人は仕事で疲れているのに、育児でイライラしている私をいつも認めてくれ、深い愛情をくれました。本当に助けられています。

表2 育児に対する肯定感・信念

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
育児は興味深いと思う	育児そのものに対して肯定的に感じる	育児そのものに対する肯定感・信念
育児は大変だけど興味深いと思う		
育児は大変だけど大切なことだと思う		
育児は楽しいと思う		
育児にゆとりがもてるようになったと思う		
複数の育児経験がよかったと思う		
きょうだいがいるのがよいと思う		
親の姿勢が子どもに伝わると思う	育児の方法に関して信念がある	
子どものしつけは重要と思う		
育児のやり方は人それぞれと思う		
自分のやり方で育児を行うのが大切と思う		
普通が一番と思う		
子どもは元気が一番と思う		
親のありがたみを感じる	育児をする自分に対して肯定的に感じる	育児をする自分に対する肯定感・信念
子どもの成長が喜びである		
子どもの存在が貴重であると感じる		
手本となる行動をとらねばと思う	育児への考え方に関して信念がある	
育児で自分も成長すると感じる		
育児はすぐに結果がみえないものだと思う		
仕事との両立を試みている		

〈多世代からのサポートが必要〉には「様々な世代の中で育つ方がよいと思う」などの2つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

家族だけに限らず、近所のおじちゃんおばちゃん、おじいちゃんおばあちゃん・・様々な世代の方々に見守られながら育児のできる世の中になってほしいです。

〈同世代からのサポートが必要〉には「ママ友がいなくてさみしい」などの3つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

転勤族なので、ママ友ができるまでは助けてもらえる人がいなかったり悩みを打ち明ける人がいなくて本当に辛かったです。

《情報サポート》には〈育児に必要な情報が必要〉の1つのサブカテゴリーが含まれた。

〈育児に必要な情報が必要〉には「子どもに必要な情報が欲しい」などの4つのコードが含まれ、以下の様な記載があった。

子育てについて様々な情報が溢れ、それに私自身振り回されているのでは？と感じてしまいます。

Ⅳ. 考察

【育児に対する不安感・困難感】では「しつけの程度が分からない」「複数の子どもへの対応が難しいと感じる」など子どもとの対応そのものに不安感・困難感を認識する一方、「育児を通して自分に否定的な感情を抱く」「自分の感情をコントロールしたい」など、育児をしている母親自身の中での不安感・困難感を認識している。子どもとの接触体験が少ないまま親になることが多いことが指摘されている中[9]、日々成長発達し変化する子どもとの関わりの中で、母親には戸惑いや迷いが生じていることが示されている。また、「子

表3 育児に関して必要としている支援

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
遊び場を充実させてほしい	育児環境を充実させてほしい	育児環境・育児制度
育児交流の場を充実させてほしい		
育児に対する社会の理解がほしい		
育児プログラムを充実させてほしい		
交通手段がほしい		
保育施設・制度を充実させてほしい	育児制度を充実させてほしい	
育児政策を充実させてほしい		
支援の地域格差を感じる		
特殊なニーズへの支援が欲しい		
育児にはお金がかかる		
経済的に不安を感じる		
発達の遅れに対する対応が不十分だと思う		
病院でのきょうだい支援がないと思う		
人的育児サポートがあって助かる	周囲の人からのサポートが必要	人的サポート
人的育児サポートがなくて困る		
子どもが病気の時看てくれる人がいない		
相談相手がほしい		
よき理解者が必要と感じる		
専門家からの支援が欲しい	専門職からの適切なサポートが必要	
支援者の違いによってストレスが生じる		
夫との意見の相違に困る	家族からのサポートが必要	
夫の協力が得にくくて困る		
夫の協力は重要だと思う		
家族等の無理解をストレスと感じる		
家族に気を遣い頼ることができない		
様々な世代の中で育つ方がよいと思う	多世代からのサポートが必要	
親世代との育児観の相違に困る		
ママ友は良い悪いの両面がある	同世代からのサポートが必要	
ママ友がいなくてさみしい		
ママ友は大事だと思う		
ネットはマイナスになると思う	育児に必要な情報が必要	情報サポート
ネットは自分に必要と感じる		
ストレス解消方法を知りたい		
子どもに必要な情報が欲しい		

どもの行動にイライラする」「余裕がないと感じる」は、子どもの自我の発達に伴い、子どもの自己主張と親の意見や感情がぶつかり合う時期の母親が認識しやすい特徴を表している。本調査の対象は、第1子が幼児後期にあたる母親が7割を占めることから、自己主張の著しい第1次反抗期の子どもの行動に振り回され、親として冷静に子どもと向き合うことの困難感を感じていると思われる。また、自己実現など自己の在り方に注目が集まる現代社会において、育児する自分をどのように捉えるかという側面の内容が抽出された。育児をする自分自身に向けた内省的な問いかけが含まれているのも、現代の母親の特徴であると言える。そのことから、育児での挫折感や困惑感は、育児する自分に対する否定的な評価として認識され、自己概念の低下に繋がる危険性を含んでいると考えられる。母親の挫折感や困難感を早期に受け止めるとともに、自我が確立していく子どもに上手く対処できる知識や具体的な手段を提供し、自信をもって子どもと関われるように支援することが必要である。

【育児に対する肯定感・信念】では「育児は大変だけど興味深いと思う」など育児そのものを肯定的に認識しながら、「育児で自分も成長すると感じる」「自分のやり方で育児を行うのが大切と思う」など母親自身の中で育児に対する信念を培っていることが推察される。『育児は育自』と言われるように、母親は育児を通して自らの肯定的変化を何らかの形で認識していることが考えられる。徳田[10]は、母親となることに伴う心理的負担は子育てを自らの成長を伴うものとして意味づけることによって回避される可能性を示唆しており、育児を通して母親が自己肯定感を高められるような育児支援の充実が重要であると考えられる。

【育児に関して必要としている支援】では「育児交流の場を充実させてほしい」「人的育児サポートがなくて困る」など少子化や核家族化の社会情勢を反映する支援が求められている他、地域コミュニティーの衰退化の中で「ママ友がいなくてさみしい」という同世代からの支援や、「様々な世代の中で育つ方がよいと思う」という多世代からの支援が必要とされている。

また、〈家族からのサポートが必要〉の中では「夫の協力が得にくくて困る」「夫の協力は重要だと思う」という両価的表現で夫からの支援が期待されている。柏木ら[11]によると、父親が育児に参加している母親は、父親がほとんど育児をしない母親と比べて、育児による制約感は有意に低く、逆に育児への肯定感が高いことが明らかにされている。2010年には改正育児・休業法が施行され、父親が子育てをしやすくなるための施策が整備されつつある。しかし厚労省の調査では、父親の育児休業取得希望者は約3割いるのに対し、平成20年度の取得率は1.23%に留まっていることが報告されている[12]。その解離には、いまだ文化的背景や社会的風潮が根強く影響していると考えられ、父親の準備性を高める取り組みはもちろん、社会的な意識改革も重要であると思われる。母親の必要としている支援は《育児環境・制度》《人的サポート》《情報サポート》と幅広く、その中でも「育児施策を充実させてほしい」といった育児支援全般に対する支援を求めるものから、「発達の遅れに対する対応が不十分だと思う」「子どもが病気のとき看てくれる人がいない」など個別性のあるニーズまで多岐に渡っており、地域で育児をする母親が実に多様な支援を必要としていることが推察される。よって育児支援に携わる医療従事者は、育児支援全体に関わる支援の必要性を踏まえた上で、個別のニーズにも対応する柔軟性が求められると考える。

V. 本研究の限界

本研究は、「育児に関して日頃感じること」という問いに対する回答を分析したものであり、各テーマに沿って具体的な質問をした場合には他のデータが抽出されることが十分に想定される。また、今回は大阪府下43市町村の自治体のうち5箇所の保健センターで実施した調査であるが、3歳児健診は自治体ごとに経過観察などの判断基準や実施方法は異なっている。従って、より多くの自治体を対象とした場合に他のテーマが抽出される可能性は否定できない。さらに大阪府は東日本大震災後16年ぶりの転入超過が報告されている都道府県であるため、他府県との比較検討も必要であると考える。

VI. 結論

地域で生活する母親の育児に対する認識と必要とする支援について調査票自由記載欄の内容分析を行った結果、【育児に対する不安感・困難感】【育児に対する肯定感・信念】【育児に関して

必要としている支援】の3つのテーマが抽出された。【育児に対する不安感・困難感】は《育児そのものに対する不安感・困難感》と《育児をする自分に対する不安感・困難感》の2つのカテゴリーが構成され、育児のみならず育児する側の母親自身に対する不安感・困難感が示された。【育児に対する肯定感・信念】も《育児そのものに対する肯定感・信念》《育児をする自分に対する肯定感・信念》の2つのカテゴリーが構成された。【育児に関して必要としている支援】は8つのサブカテゴリーから《育児環境・育児制度》《人的サポート》《情報サポート》の3つのカテゴリーが構成された。

謝辞

本研究の実施において、ご協力いただきましたお母様方、保健センター職員の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

1) 佐藤純子、2010、保育・介護労働の現状と課題 その4:保育所における地域子育て支援の実態調査を通じて、淑徳短期大学研究紀要 49、99-110
2) 古川洋子、2008、日本における産み育て支援システムの構築、人間看護学研究 6、71-76
3) 原田正文、2006、子育ての変貌と次世代育成支援、名古屋大学出版会、210-226
4) 茂本咲子、奈良間美保、浅野みどり、2010、母親が認識する乳児の状態と育児困難感の特徴とその関連、小児保健研究 (0037-4113) 69 (6)、781-789
5) 坂間伊津美、松田宣子、2010、乳児をもつ母親の育児不安と育児情報の利用意識との関連、茨城キリスト教大学看護学部紀要 (1883-9525) 1、11-15
6) 渡部綾、工藤節美、2007、育児不安をもつ母親への保健師の効果的介入—家庭訪問における初期の関わりに着目して—、保健師ジャーナル 63 (3)、280-285
7) 茂本咲子、奈良間美保、2011、早産で出生した乳児の母親の育児困難感の特徴と関連要因 正期産児の母親との比較より、日本小児看護学会誌 (1344-9923) 20 (3)、28-35
8) 舟島なをみ、1999、質的研究への挑戦、医学書院、42-53
9) 斎藤嘉孝、2009、親になれない親たち、新曜社、30-52
10) 徳田治子、2004、ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から、発達心理学研究、15、13-26
11) 柏木恵子、若松素子、1994、「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み、発達心理学研究、5、72-83
12) 厚生労働省、「平成20年度雇用均等基本調査」結果概要、2